

# 夢の島ポツダム

## あるいはプロイセンの「シヤム」(一)

—— 慈しみなくしては何も育たない —— フォン・レネ

桑 原 聡

### 序

プロイセンの「シヤム」——この名称はプロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム三世の皇太子フリードリヒ・ヴィルヘルムに由来する。これが指しているのはサンスーシー宮庭園に一八二五年新たに買い増された土地シャルロッテンホーフのことである。後にシンケルの手によって瀟洒な離宮、ローマ風呂場、庭師の家など——これらはシンケルが実際に建てるのができた建築物のなかでもっとも美しいもの一つである——が建てられ、またレネによって風景式に造園され、一九世紀前半のプロイセンでもっとも創造力に溢れる芸術家の希少な共作としてその名を残すことになる、ポツダム宮庭園の中央南西部分がそれである。この一角は西北に新宮 Neues Palais、北東にロコロコのシノワズリーの代表作、かの有名なフォーリー「中国風園亭」Chinesisches Hausがある。この茶亭ではライトグリーンの地に中国人を模った像が、あるいは音楽を奏で、あるいは茶を飲む姿で金の輝きを放ち、建物の天辺には日傘を指した大人が胡座を組んで座して黄金の異彩を放っている。東はレネ作



の風景式庭園の傑作、マルリー園につながり、北には一八五〇年に建築が始まった、遠目から見るとイタリア式に軽快でありながら、その実、巨大なオランダジェリーが高台の上に控えている。シャルロットテンホーフはそういう場所に位置している。

シヤムは当時のオリエンタリズム—シヤムは自由の国と夢想されていた—が反映している名称である。この夢想家皇太子、後のフリードリヒ・ヴィルヘルム四世は祖父フリードリヒ大王がポツダムに建設したサンスーシー宮と庭園を「夢の島」に変えようと欲していた。事実、サンスーシー宮を中心に北東、ハーフェル川右岸にはルイーゼ妃が愛したクジヤク島、フリードリヒ・ヴィルヘルムの弟カルルがシンケルとフォン・プエックラー＝ムスカウ侯爵に造らせ、イタリア風の白亜の館とブレジャヤーグラウンドが美しいクライン・グリーンニケ、

その中間にシンケル設計の新ゴシック様式のバーベルスベルク城、北にチエチーレンホーフと名だたるものみを挙げて、名宮、名園が順次造られ、ポツダム周辺は一つの総合芸術と化したのである。それに関わった建築家、造園家は一流の芸術家であった。建築家カール・フリードリヒ・シンケル Karl Friedrich Schinkel、造園家ペーター・ヨーゼフ・レネ Peter Joseph Lenné、プエックラー＝ムスカウ侯爵 Fürst von Pfückler=Muskau とかれらを取り巻く様々な分野の芸術家たち、彼らはまさにプロイセン文化の華を作り上げた人々であった。庭園は自然と人工が交わる場所として文化の中心だったのである。ここではレネの仕事を中心にポツダムの庭園文化を考察することにしたと思う。

ところで、庭園なのに建築家の名が上がっていることを訝る人もいるかもしれない。しかし、ヨーロッパの



庭園文化は建築と一体であることはルネサンス以来の伝統である。それはバロック・ロココまでの整形式庭園様式を放棄し自然を理念として成立したイギリス風景式庭園においても同じである。これについては後に触れる。

### 1 ラインスベルク

プロイセンの庭園について述べるには、まずはラインスベルクに触れないわけにはいかない。何故なら後にサンスーシーに宮殿と庭園を造るフリードリヒ大王が未だ皇太子の頃、一七三四年にその父軍人王フリードリヒ・ヴィルヘルム一世はこの土地を皇太子のために購入し、皇太子は一七三六年から一七四〇年までの四年間、生涯でもっとも幸福な時代を過ごすことになったからである。このラインスベルク時代に皇太子は友人との交友に、音楽に、書物に、そしてヴォルテールとの文通に時を費やすことができたのである。ラインス

一 ラインスベルクについての記述の第一はなんと言ってもフォンターネであろう。Fontane, Theodor: Wanderungen durch die Mark Brandenburg Bd. 1/1 Die Grafenschaft Ruppin. 他に利用した書物は以下の通りである。Hennert, Carl Wilhelm: Beschreibung des Lustschlosses und Gartens Sr. Königl. Hoheit des Prinzen Heinrichs Bruders des Königs; zu Rheinsberg, wie auch der Stadt und der Gegend um dieselbe. Unveränderter fotomechanischer Nachdruck der Originalausgabe (1778), hrsg. von der Generaldirektion der Stiftung Schlösser und Gärten Potsdam-Sanssouci, 1991. 一八七二年フォンターネを片手にラインスベルクを訪れたイギリス人ハミルトンの著書も有用である。Hamilton, Andrew: Rheinsberg. Das Schloß, der Park, Kronprinz Fritz und Bruder Heinrich. Berlin (Aufbau Verlag) 1996. Rheinsberg. 30.05.2015 Ausstellung zur 650-Jahrfeier der Stadt Rheinsberg 1985. Eine märkische Residenz des 18. Jahrhunderts. Hrsg. von der Generaldirektion der Stiftung Schlösser und Gärten Potsdam-Sanssouci, 1990 及び Graf von Knorckow, Christian: Rheinsberg. Ein preussischer Traum. 3. Auflage, München (dtv) 2004 を参照。



ベルクの町はベルリンの北方およそ八五キロの距離にある、マルク・ブランデンブルクの静かな湖水地方、グリーネリク湖南端にある土地である。北にはラインスベルク湖が続き、北東にはフォンターネ晩年の作『シュテヒリン』——マルクの田舎での選挙で社会主義者が擡頭してきたことに保守派のユンカーたちが反発するが、その中であって老シュテヒリンのみが古い時代が過ぎ去り新しい時代が到来しつつあることを悟る様をゆつたりとした筆致と諧謔を交えて描いた傑作——で有名なシュテヒリン湖が位置する。森と湖に囲まれたこの土地はマルク・ブランデンブルクの中でもっとも美しい場所の一つである。ついでに言えばクルト・トホルスキーが『恋人たちのラインスベルク』を書き、それが大ヒットしたために現在クルト・トホルスキー記念館が城の中に設けられてもいる。

さて、フリードリヒは彼の建築家クノーベルスドルフ Georg Wenzeslaus von Knobelsdorf に命じてこの城をシンメトリーのロココ建築に改修させた。それは、グリーネリク湖の南端右岸リン川が注ぐところであり、赤屋根に外壁は薄いクリーム色に塗られ、正面は東側、ラインスベルクの町に面し、コの字型で二つの翼が湖に向かって南北に走り、湖側の先端にはそれぞれ塔が付されている。若きフリードリヒが音楽を楽しんだ北側の翼にある「音楽の間」の天井画には彼が好んだアントワーン・ペーヌ Antoine Pesne が「闇を追い払うアウローラ」を描いた。父王に対するフリードリヒの思いの寓意である。この絵が「若き光の皇太子が不機嫌王を追放する」の意に解されたことをフォンターネは紹介している。<sup>二</sup>

さらにラインスベルクがプロイセンの庭園文化史において重要な意味を持つのは、一七四四年から名目上の

城主、実際には一七五三年からこの城に住んだフリードリヒの弟ハインリヒが一八〇二年に没するまでこの城と庭園を慈しんだからである。兄フリードリヒの「より明るい光」の陰に隠れ世に知られることあまりに少ないことを嘆き、ハインリヒには彼を讃える「詩人」が欠けていたと憤ったフォンターネは、彼の足跡を「ラインスベルク訪問記」に記したのだった。<sup>三</sup>「恐れを知らぬ非の打ち所のない」名将であり、「賢明で機知に富み」、文学芸術を愛したこのハインリヒは、兄との確執の中で、兄が造らせたラインスベルクの庭園を一大庭園へと拡張する。このラインスベルクには兄弟それぞれの思いが残されているのである。

庭園は先ずフリードリヒ時代にクノーベルスドルフがロココ部分を設計し、その後はハインリヒが没する一八〇二年まで七〇年以上の間、間断なく手を入れられた。この庭園は、グリーネリク湖の右岸にある城から左にリン川を越えて湖を巻いて城から真正面の位置にある対岸の高台のオペリスクを越えポーペロウの森まで続く。そのため庭園様式も統一されたものではなく、時代の趣味を如実に反映することになった。城の中庭からリン川を越えて庭園部に入り湖の南側はロココの整形式様が残っているが、その先及び湖の西側はイギリス風景式に造園されている。

城の湖側の中庭部分は今は湖に開け、対岸のオペリスクと結ばれ、美しい眺望が見る者を楽しませてくれる。



一 二 Fontane: Wanderungen, S.273.  
三 a.a.O., S.278ff.

しかしここはフリードリヒの時代には、城の塔と塔の間を結ぶためにクノーベルスドルフが柱廊<sup>コロンナデ</sup>を建造したが、その前には木々が植えられていたままであった。ハインリヒは一七六九年に木々を移し替え、その代わりにここに芝生を植え、テラコッタの花鉢を二台置き、さらにはカラーラ産大理石で作られたアポロ像と四大元素を表す像を建て、湖への視界を確保したものである。

ハインリヒはクノーベルスドルフが造園したロココ庭園部分に様々な工夫を凝らし、また東側にイギリス風景式庭園様式を導入した。ハインリヒの努力によってラインスベルク庭園は様々な仕掛けで訪問者を驚かせ、同時に湖と北側に広がる森を借景として美しい景観を散策者に提供している。これに触れる前にまずは「イギリス風景式庭園」に述べておく必要があるだろう。

### イギリス風景式庭園

左右対称の幾何学的なバロック庭園はアンドレ・ル・ノートル Andre Le Nôtre によって基本形が創造され、ルイ十四世のヴェルサイユ宮庭園でその完成を見、瞬く間にヨーロッパ中の宮廷に広がってゆく。だが、一八世紀になると、とりわけイギリスにおける市民階級の勃興と共に、バロック庭園のシンメトリーを反自然と批判する新しい美学が生まれ、新しい庭園様式が成立する。イギリス風景式庭園がそれである。

イギリス風景式庭園は一般に二つの流派に区分される。一つは、ケイパビリティ・ブラウンことランズロット・ブラウン Lancelot Brown (一七一六～八三) に代表されるイングランドの緑豊かな美しい自然を自然らしく、穏やかに起伏する土地に芝生、ゆったりと蛇行する水の流れを庭園に反映させようとした流れである。もう一つは、クロード・ロラン、プッサン、サルヴァトーレ・ローザの絵画に描かれる理想の自然ないしは荒々しい自然を庭園に映そうとした、そしてそれと関連する建造物を庭園に配した、いわゆるピクチャレスク美学



による造園様式である。ここではピクチャレスク庭園についてのみ簡単に触れておくことにする。ハインリヒの庭園とも関連するからである。

風景式庭園の初期の名園の一つ、造園家ウィリアム・ケント William Kent (一六八五～一七四八) が造園したオクスフォードシャーにあるロウシヤム庭園 Rousham Park (一七三八年着工) はゴシック様式の城の背後の北斜面を利用し、さらには隣の牧場を借景とし、初夏の晴れた日には流れる雲を背景とした広々とした空が目の前に広がり風の音が耳に心地よい、簡素で美しい庭園である。宰相の子息で当代随一の文人であったホーレース・ウォルポール Horace Walpole、自身後にストロベリー・ヒル Strawberry Hill にゴシックの館を建てていわゆる「ゴシック・リバイバル」を引き起こしたウォルポールはロウシヤムを訪れ、「ケントの作品の中でもっとも魅力的なもの」と賞賛し、「これはケンティッシュメだ」とイタリアを訪れたことのあるこの文人は賛嘆している。<sup>四</sup> 恐らくこの北斜面に広がる風景にウォルポールはカンパーニヤの穏やかな田園風景を重ねていたのであろう。また庭園内にはドーリス式神殿、ヴィーナス像、アポロン像、廃墟、カスケード、ピラミッド等がさりげなく建っている。

ピクチャレスク庭園の代表格は、銀行家ヘンリー・ホアー二世 Henry Hoare (一七〇五～八五) が作り上げたウイルトシャーにあるストアヘッド庭園 Stourhead Garden であろう。ホアー二世はイタリアへのグラランドツァー帰国後一七四四年頃からストアヘッドの造園に着手した。自身プッサンの女婿ガスパール・デュフェ

Gaspar Dughet の絵を所持していたホアー二世はここに桃源郷を作り出そうとしたのだ。この庭園には、クロード・ロランの「デロス島のアネアス」に描かれた古典古代の建築物をモデルとしたと言われるパンテオンとフローラの神殿が建てられている。この庭園全体にはアネアス神話が織り込まれている。中央に一周二マイルある人工湖を配し、その周囲に丘を巡らし、高低差を利用して、歩くごとに新しい景観が眼前に開かれるイギリス風景式庭園の名園の一つであるが、グロッタ、アポロ神殿、パツラディオ様式の橋、オベリスク、ゴシック様式の園亭がアイキヤッチャーとしてこの庭園を彩っている。また湖の西側にはローザの風景画を思わせるような大きな滝が作られてもいる。

何故風景式庭園に古代ギリシアの神殿やらゴシック寺院があるのかと訝る人もいるであろう。古典古代、とりわけ古代ギリシア（人）を理想の自然とする

見方はとりわけヴェインケルマン以後定着することは周知のことだろう。当時のイタリア熱、古典古代に対する熱狂を考えればパラッディオ、グロッタは欠かすことのできない建造物であった。さらに、ゴシックあるいは古の偉人たちに対する愛着と尊崇は、過去の、未だ文明に毒されていない、自然のままの自由なイギリスという、これまた理想化された、ナシヨナリスティックな含意、ということは現在の政治に対する批判という含意をもつ。もっともウォルポールは一七五〇年に「ゴシックないしは中国風建物は気まぐれで新奇な装いを与えてくれ、それはとても心地よいものだ」という言葉を残している。

また、自然讃仰そのものがアデイソンによって口火を切られたときに既に政治的意味を持つていたこともよく知られたことであろう。自然を理想とした風景式庭園が絶対主義の象徴である整形式バロック庭園に対する







批判と不可分であったことを考えれば、イギリス風景式庭園はその成立のそもそもにおいて単に新しい美学様式だったのではなく、優れて政治的ディスクリスに纏綿されていたのである。

ところがピクチャレスクはその極端においてはマニエリスムに化す。ここではマニエリスムをクルティウスの定義に従って反古典的、すなわち均衡・調和を敢えて歪める傾向としておく。ストアヘッド庭園、なかんずくロウシャム庭園においては自然(演出)部分と人工建造物は絶妙のバランスを保っている。それに対し

て、マニエリスティックな傾向を押し進めたのが、ウイリアム・チェンバース William Chambers (一七二三―九六)<sup>五</sup>である。多様性を求める心は、風景式庭園にさらに新しい要素を付け加えた。エグゾテイシズムである。「驚きこそ真に美しい」とは、マニエリスト、ジャン・バティスト・マリーノの言葉であるが、それを風景式庭園に実現したのがチェンバースである。

チェンバースが造園に当たることになるキュー・ガーデンズ Kew Gardens はジョージの父フレデリック皇太子 Frederick Prince of Wales が一七三一年に土地を購入し、ここに大庭園と大植物園を造営する。最初に造園を担当したのは、ウイリアム・ケントであった。四九年から死の年五一年にかけてフレデリックはキュー・ガー

五 チェンバースに関しては Harris, John and Snodin, Michael; Sir William Chambers, Architect to George III, New Haven and London, 1996 を参照。この書はロンドンとストックホルムで開催された、同名の展覧会のカタログ。チェンバースの伝記的な部分については同書の第一章 Harris, John: Introduction, S.1-10 を参照。チェンバースのキュー・ガーデンズへの関わりについては第六章 Harris, John: Sir William Chambers and Kew Gardens, S.55-67 を参照。キュー植物園については以下の書を参照。 Desmond, Ray: Kew, The History of the Royal Botanic Gardens, London (Harvill Press) 1998.

デンズの大改修に取りかかる。チェンバーズがフレデリックとそしてキュー・ガーデンズを知るのは恐らく、四九年七月にスウェーデン東インド会社を辞めパリに到着するまでの間にあるおよそ二ヶ月の空白期間のうちであつたらうと推測されている。チェンバーズをフレデリックに近づけたのは、中国で実際に中国建築と造園を目的の当たりにし研究してきた人物としての彼の名声であつた。その後パリをも後にしたチェンバーズはローマでキュー・ガーデンズのために孔子廟のデッサンを描き、また五一年に亡くなるフレデリックのための霊廟のデッサンを作製している。彼はさらにローマで後の同僚となるヨーハン・ハインリヒ・ムンツ Johann Heinrich Muntz (一七二七〜九八) と知り合う。後者は四八年にフレデリックのためにムーア建築を研究するためにスペインに滞在し、五〇年にムーア様式の建物のデッサンを描き、それは五八年に実際に建設されることになる。

フレデリックの死後、造園はその后オーガスタによって引き継がれる。フレデリックとの婚姻の年三六年よりキューを住まいとしていたオーガスタの信任の厚いビュート伯 Earl of Bute がキュー・ガーデンズの責任者となり、先に触れたようにチェンバーズを五七年にオーガスタの建築家に任命する。チェンバーズはキュー・ガーデンズを「建築庭園」 architectural garden に仕立ててゆくことになる。

チェンバーズの美学は以下の通りである。彼は、自分が見たという中国の庭園について次のように言う。「自然こそ彼ら(中国人)の手本である。彼らの目指すところは、自然をそのすべての不規則性の美において模倣することである。」<sup>六</sup> 「不規則性の美」 all her beautiful irregularities という言葉でチェンバーズが意味しているのは、たんにバロック整形式庭園の美学に対する対抗以上のものである。彼によれば中国人は庭園の情景を三つのカテゴリーに分け、それぞれを「快」 pleasing、「恐怖」 horrid、「魅惑＝驚愕」 enchanted と名づけていると言う。魅惑の情景についてチェンバーズは次のように説明している。

「彼らの魅惑の情景は大体私たちがロマンティックと呼ぶものに一致し、この情景において彼らは驚きを引き起こすために幾つかの巧妙な工夫を行っている。彼らは時々急流を、ないしは奔流を作り、地下に水路を引き、それらの騒然たる音は新客の耳を撃ち、客はその音がどこからやってきているものや判断らず途方に暮れる。また他の場合には彼らは岩山やら建物やらまた構図を決める他のものを配置する。しかもその目的のために作られた様々の隙間や穴を吹きすぎてゆく風が奇妙な、尋常でない音を発するようにである。彼らはこれらの情景にありとあらゆる種類の異様な木や植物や花を導入し、人工のそして複雑な木霊を作り出し、様々の巨大な鳥と動物を放し飼いにしているのだ。」<sup>七</sup>

恐怖の情景の描写は次の通りである。

「恐怖の情景においては彼らはせり出した岩、暗い洞窟、どの方向からも山々を激しく迸り落ちる大瀑布を導入する。木々は不格好で、一見荒々しい暴風雨によってずたに引き裂かれたかのように見える。何本かは倒れ、奔流の流れを妨げており、あたかも流れの狂奔によって引き倒されたかのように見える。稲妻の力によって粉々に破壊されたかのように見えるものもある。いくつかの建物は廃墟であり、またあるものは火災のために半分焼失しており、山に散在する、いくつかのみすぼらしい小屋は住人の存在と悲惨を同時に示すのに役立っている。これらの情景は大抵快の情景の後に続いている。中国

六 The Genius of the Place: The English Landscape Garden 1620-1820. Edited by John Dixon Hunt and Peter Willis, London 1988, S.283.

七 a.a.O., S.284. From "Designs of Chinese Buildings, Furniture, Dresses, Machines, and Utensils" (1757)

の造園家はコントラストが人の心にどんなに強く働くかを知悉しているので、常に突然の変化を、そして形、色彩、陰の人の眼を撃つコントラストを心がけるのである。<sup>18</sup>

そしてチェンバーズは、彼の美学を次の言葉で定式化する。「多様性こそはいつも快いものであり、新奇さが美にとつてかわることもしばしばである。」<sup>19</sup> チェンバーズは自分が中国で見たという中国庭園に仮託して己の美学を語っている。それは「新奇さ」、「驚愕＝魅惑」、「恐怖」を中心概念とするピクチャレスク美学であり、そのエグゼティシズム版である。

ここにチェンバーズはおよそ六年の間に、同僚のムントツと共に支那式パゴダ、モスク、回教宮殿アルハンブラ、ゴシック寺院、廃墟など二五以上を建てた。これと並行してアイトン William Aiton (一七三一〜九三) によって後に「植物園」Botanic Gardens と呼ばれることになる「葉草園」Physic Garden<sup>20</sup> 「エグゼティックガーデン」Exotic Garden<sup>21</sup> 「花園」Flower Garden<sup>22</sup> 「動物園」Menagerie<sup>23</sup> 「飼鳥園」Aviary (いずれもシノワズリー建築) の整備が進められた。キュー・ガーデンズはそのマニエリスティックな奇観で現在も知られる。この庭園を一つのディスクルスで説明するとすればそれは「新奇と多様」ということになるであろう。この庭園は過剰そのものである。丁度リチャード・テンプル伯がチャールズ・ブリッジマン Charles Bridgeman、ケント、ブラウンといった当代一流の建築家・造園家とともに作り上げたストウ庭園 Stowe Garden において成立当初から政治的メッセージを持たされた古代ギリシア神



殿、ゴシック寺院、パラッディオ様式の橋、古の偉人の碑と並んでシノワズリーの中国風園亭が既に一七三八年には建造され、さらに年を追うごとにキャプテン・クックの記念碑のような新奇な記念碑まで作成され、この庭園は最後にはマニエリスティックな一大奇観を呈したのと同断である。両庭園には時代も場所もごちゃ混ぜの、珍しい建築様式が集められた「驚異博物館」Wunderkammerの趣がある。<sup>+</sup>

ところで、後にもう少し詳しく触れるつもりだが、イギリス風景式庭園はドイツに導入された際に初期のイギリス風景式庭園が持っていた政治的意味の大部分を失う。それはイギリスにおいては風景式庭園が絶対王政に代わる市民階級中心の新しい時代の美学として受け入れられたのに対し、ドイツには未だ市民階級が成熟しておらず、この庭園様式を導入したのが王侯・貴族階級であった点に求められるだろう。政治的メッセージを失ったこの様式は純粋に美学的次元で受容されることになる。ドイツでは当時の、クロップシュトゥックに代表される自然賛美の文学趣味に合わせて風景式庭園が「感傷的」sentimentalschlempfindsam 庭園と呼ばれることになる。<sup>+</sup>もともとイギリスにおいても時代が下るにつれて庭園が最初期に持っていた政治性は失われてしまうことは避けられなかった。



八 aaO, S. 284.

九 高山宏『ふたつの世紀末』青土社、1988年、98頁。

十 バルトルシャイテス『著作集』一『アペラシオン』（国書刊行会、一九九三年）二二二頁。

十一 Meier-Soljk, Frank und Greuter, Andreas: *Landschaftsgärten in Deutschland*, Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1997, S.18f.



さて、ハインリヒの庭園であるが、オベリスクへの途上には、現在、修復中のグロッタ、廃墟が見られるだけであるが、かつては数多くの建造物があったという。ハインリヒの建築家であったヘンネルト Carl Wilhelm Henriet が一七七八年に公刊した『ハインリヒ皇子のラインスベルク離宮と庭園案内』に拠ればピラミッド、八角形の屋根をした中国風園亭、パイナツプルハウス、神殿、貝殻で裝飾されたグロッタ（その趣向はポツダム新宮のグロッタの間を思い出させる）、灯台、廃墟、酪農場その他がハインリヒの時代に建てられていた、あるいは造成されていたという。さらには湖左岸の森にもウエリギリウス神殿、エジプトのピラミッド、隠者の庵（エルミタージュ）、迷路、滝が作られていたという。とりわけ「友情の神殿」Freundschaftstempel はハインリヒのお気に入りの場所で、季節の良い時期にはここで昼食を取ったという。デイネは午後二時であった。また、フリードリヒもハインリヒも船遊びに興じたラインスベルク湖にある、ローマ建国神話に由来するとフリードリヒが信じその旨をヴォルテールに書き送り才気溢れるこの哲人が微笑みでもって答えたというレームス島には三階建ての中国風家屋（次ページ図版参照）があり、ポツダムの中国風園亭同様屋根にはパラソルを掲げた中国人が金メッキを施され座っていたという。この庭園を訪れた同時代人の一人は次のように書き残している。「この庭園は、それを魅力溢れる滞在場所にしうるものをすべて一つに兼ね備えている。英国式に造られた部分は、そこを逍遙する者から歩を進めるごとに新たに賛嘆と驚きの声を引き出すのだ。この庭園にある温室とオランジェリー、それを飾る花壇、それを覆う芝生、我々の目を欺いてその広大さを隠すべく建てら

れたあまたのパピリオン、これらすべてはこの庭園を考案し実現した天才の偉大を示しているのだ。(中略)そこに農家があるかと思うと今度は古代神殿、さらにはウエルギリウスの墓所がある。この墓のある場所はいわば自然の全体を見せてくれることによって人を魅了し、ウエルギリウスの壮麗な歌の精神で我々に靈感を吹き込んでくれる。グロッタ、廢墟、見事に造られた谷間の草原、田舎風のエルミタージュ、柱廊、巖、オベリスク、泉と噴泉、日覆い、芝生、くねる小道、芳香を放つ灌木林、数知れぬ園亭、中にはほとんど日差しが届かないボスケ、晴れやかな情景の隣には荒々しい光景、それはあたかも身の毛もよだつ光景に晴れやかな光景を対置するよう設計されているかのようだ、噴水盤、船着き場には船とゴンドラが係留されている……」<sup>十二</sup>ゴンドラのうちもつとも立派なものはスウェーデンで建造された。それはここを訪れたことのあるスウェーデン王妃からの贈り物であった。

今の引用の最後に述べられていることは、上に見たチェンバーズの美学と一致する。自ら中国風の絵を描きもしたハインリヒは明らかにピクチャレスク美学の信奉者だった。そしてハインリヒは一八〇二年に亡くなる直前自らの墓所としてピラミッドを建てさせたのである。死後の復活を信じていたピュックラー・ムスカウもまたおよそ半世紀後にブラーニッツ Brantiz の庭園にピラミッドを建て、一八七一年に八五歳で亡くなるとそこ



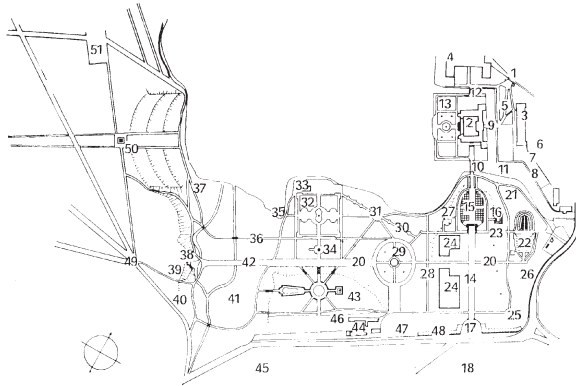
に葬られることになる。ハインリヒが死後の復活を信じていたかは今のところ審らかにしえない。

次にラインスベルク庭園俯瞰図を掲げる。右は先のヘンネルトの『ハインリヒ王子の離宮と庭園案内』（一七七八年）からのもの、左は『ラインスベルク 一八世紀マルクの首都』Rheinsberg. Eine märkische Residenz des 18. Jahrhunderts」という、一九八五年に催されたラインスベルク建設六五〇年記念展覧会カタログから取ったものである。両者は上下逆さまである。ヘンネルトものでは湖が下側、左のものでは上側となっている。ヘンネルトの図からはこの庭園の往時の姿が若干なりとも偲ばれる。





●夢の島ポツダムあるいはプロイセンの「シャム」(一)



19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
望楼	オペリスク	庭園入り口	ピラミッド	オランジェリー花壇	主道	離宮島	廷臣館橋	ネプチューン橋	離宮庭園橋	離宮橋	菩提樹園	城壁	馬場	離宮前広場	廷臣館	厩舎	城	城門
36	35	34	33	32	31	30		29	28		27	26	25	24	23	22	21	20
小車道	ファロス	円形落葉松園	グロッタ	休息所	星形花壇	彫像の小道	形花壇	オランジェリー円	濠	ルヘルムⅡ円形花壇	アウグストⅡヴィ	パインナップルハウス	中国式園亭	休息所	交差道	劇場	イギリス式庭園部	交差道
		51		50	49	48	47	46	45	44		43	42	41	40	39	38	37
		菜園小屋	テラス	オペリスクのある	四又路円形花壇	濠	薔薇園	氷室	レームベルク	庭師の家	殿のある葡萄畑	フォルトウーナ神	大車道	イギリス式庭園部分	祭壇	バツカス神殿	エゲリア・グロッタ	縦毬の家



さて、右の図面で注目したいのは「パイナップルハウス」である。この庭園にはオランジェリーの他に「パイナップルハウス」が建てられていた。オランジェリーは言うまでもなく北方の地で南国の果実を実らせるために考案された温室であり、植物園の前身である。オレング、橙、レモンなどの芳香を放つ柑橘類が珍重され、なかでも橙 *Pomeranzen* は一六世紀中葉にはドイツに移入され、一七世紀には多くの庭園をその香りで満たし、果実の色彩と常緑の葉で人の目を楽しませることになった。さらにはこれらの柑橘類を本来育たないはずの北方

の地で育て収集することは、北方の王侯貴族にとつては常春の楽園の象徴とともに、<sup>ナトウラリア</sup>自然の産物も<sup>アルテフ</sup>人為の産物も「天地の創造者である神そのものにその根源が帰せられる進化の過程の始めと終わり」<sup>十三</sup>として収集したクンストカンマー *Kunstkammer*（「珍奇博物館」）の思想と軌を一にする。オランジェリーの隆盛と、自然と人工の珍かなものを一緒に集めたクンストカンマーないしは「驚異博物館」*Wunderkammer*の流行が同じバロックの時代に生じたことには得心がいく。さらには北方の地で南国の柑橘類を育てることは、当然、自然に対する支配を意味することにもなるだろう。<sup>十四</sup>一七世紀は近代科学が形をなしてゆく時代でもあった。またバロックの時代において柑橘類はその珍しさによってヘラクレスのリング、ギリシア神話のなかでアトラスの娘たちが守っていたのをヘラクレスが奪ったあの黄金のリングと同一視されたとも言う。<sup>十五</sup>バロックのヘラクレス崇拜と柑橘類愛好には深い関係があるのである。文化史におけるオランジェリーのもつ意味は実に深い。

パイナップルはコロンプスが一四九三年に発見したが、ヨーロッパのオランジェリーに導入されるのは柑橘類に一世紀ほど遅れた一七世紀の中頃である。パイナップルはその果実の美味と形態の面白さからたちまちヨーロッパの諸侯の垂涎の的となる。ヨーロッパの庭園でパイナップルの装飾が至るところで見られるのはそのためである。

とりわけイギリスの庭園ではパイナップル栽培が盛んであった。チャールズ二世(一六三〇～一六八五)がイギリスで最初に栽培されたパイナップルを手にした肖像画が残されている。それに対して一八〇三年にはジェーン・オースティンは『ノーサンガー・アベイ』で、同名の僧院の持ち主である将軍に菜園では「去年パイナップルは百個しか採れなかった」と言わせている。<sup>十六</sup>

ここでは、ハインリヒの庭園と同じ頃一八世紀の中頃に現在ある姿へと改修された、ヴェルツブルク近郊のファイツヘヒハイム *Veitshochheim* のロココ庭園にあるパイナップル装飾の写真を掲げておく。ベルリンの北方のラインスベルクに「パイナップルハウス」があるのにはこうした背景があるのである。パイナップル装飾はポツダムにおいても用いられるが、それについては後述する。

一七九一年七月四日、すばらしい夏空のもと、何千という観衆の見守るなかでオペリスクの除幕式が行われ

十三 シヤイヒヤ、エリーザベト著『驚異の部屋 ハプスブルク家の珍宝蒐集室』平凡社、一九九六年一六頁参照。

十四 Gröschel, Claudia: Die goldenen Äpfel. Zitrusfrüchte zwischen antiken Mythen, Herrschaftssymbol und bildender Kunst, in: Der Süden im Norden. Orangerien - ein fürstliches Vergnügen. Hg. Staatliche Schlösser und Gärten Baden-Württemberg, Regensburg (Schnell + Steiner) 2004, S.6-13.

十五 Gröschel, a.a.O.

十六 『ノーサンガー・アベイ』中尾真理訳、キネマ旬報社一九九七年、Northanger Abbey in The Novels of Jane Austen, ed. by R.W. Chapman, Oxford University Press, Vol. V, 1988, S.178.

た。最初に述べたようにこのオベリスクは湖を挟んで城の真向かいの英国式庭園部とボーペロウの森の間の丘に建てられている。それは、ハインリヒがラインスベルクに建てた数ある建造物のなかでもっとも厳肅なものであるとともにもっとも政治的なものである。このオベリスクはシュレジア戦争の際コリンの戦いに敗れて以来フリードリヒの不興を買い若くして亡くなった兄「アウグスト・ヴィルヘルムの想い出に」捧げられている。同時に七年戦争に出陣し、「その勇気と叡智のゆえに永遠に記憶に留めおかれる価値のある」プロイセンの英雄たちにも捧げられている。彼らは皆フリードリヒに疎んじられた者たちである。その数は二八名に及ぶ。オベリスクの四面にはメダイヨンの上に一人一人の名とその功績がフランス語で記されている。この碑にはフリードリヒの名はない。ハインリヒはフリードリヒ同様フランコフィルであったが、除幕式に当たったの演説もフランス語で行った。そこに次の一文があることにフォンターネは注意を喚起している。「この国王自らが起草した伝記、彼の死後に公刊された国王への賛美の書の山を前にして私は付け加えるものを知らなかった。だが、それに対して、偉大ながら、表に出ないところで行われた貢献はこれらの賛美の書によっては忘却から救い出されはしなかったし、恐らく救い出すこともできなかつたのである。」<sup>七</sup> ハミルトンはこれにハインリヒの書簡の一節を付け加えている。「私は、私の力の及ぶ限り、心ある人々に、大フリードリヒがその嘘だらけの回想録のなかで一言も言及していないすべての者たちの名前をもう一度記憶に呼び戻そうと努めたのです。」<sup>八</sup> このオベリスクにはフリードリヒのお気に





入りの將軍三名の名が落ちてゐる。ヴィンターフェルト、Winterfeldt、ヴェーデル、Wedellとフケー、Fouquéである。後者は『ウンディーネ』の作者の祖父である。このオペリスクの意味するところは明らかであろう。ラインスベルクには二人の兄弟の確執の跡が今でも残されているのである。再びフォンターネを引用してこの章を終えることにしよう。「メダイヨンに刻まれたこれらの碑文は一つ一つが重要であり、この反抗する王子が兄王の偉大なる歴史書(『七年戦争史』のこと…筆者註)に対して書いたと言われている「批判的解説」(ハインリヒの死後遺言に従つて焼かれたという…筆者註)が人の知り得るところとならない限り、これらの碑文は我々にとつてあの「解説」に記されていたであろうハインリヒの見解を示唆するものであり、その簡潔な概略と見なされるのである。」<sup>十九</sup>

十七 Fontane, a.a.O., S.298.  
十八 Hamilton, a.a.O., S.163.  
十九 Fontane, a.a.O., S.291.

## 図版出典

- 二頁 ポツダム・サンサーシー宮 (筆者撮す)  
 三頁 ポツダム・中国風園亭 (筆者撮す)  
 四頁 ラインスベルク城 (筆者撮す)  
 五頁 ラインスベルク城中庭アポロ像 (筆者撮す)  
 七頁 ロウシャム庭園 (筆者撮す)  
 八頁 スタアヘッド庭園 (筆者撮す)  
 九頁 中国風パゴダ (キューガーデンズ 筆者撮す)  
 十二頁 中国風パゴダ、アルハンブラ、モスク (キューガーデンズ)  
     William Marlow: A View of the Wilderness, with Alhambra, the Pagoda and the Mosque in Kew Gardens, 1763 - 5, in:  
     Harris, John and Snodin, Michael: Sir William Chambers. Architect to George III, New Haven and London 1997, S. 65.  
 十三頁 キャプテン・クック記念碑 (ストウ庭園 筆者撮す)  
 十四頁 グロット (ラインスベルク、図面番号三三三 筆者撮す)  
 十五頁 レームス島中国風パゴダ (Rheinsberg. Eine märkische Residenz des 18. Jahrhunderts. Ausstellung zur 650-  
     Jahresfeier der Stadt Rheinsberg 1985. Hrg. von der Generaldirektion der staatlichen Schlösser und Gärten Potsdam-  
     Sanssouci 1990 445)
- 十六頁 ラインベルク庭園俯瞰図 (ヘンネルトより)  
 十七頁 ラインスベルク庭園俯瞰図 (展覧会カタログより)  
 十八頁 Indianischer Pavillon in Veitshöchheim (筆者撮す)  
 二十頁 ラインスベルク城から見たオベリスク (筆者撮す)  
 二十一頁 オベリスクのアウグスト・ヴィルヘルムの肖像 (筆者撮す)